

東京妓情

醉多道士戯著

上

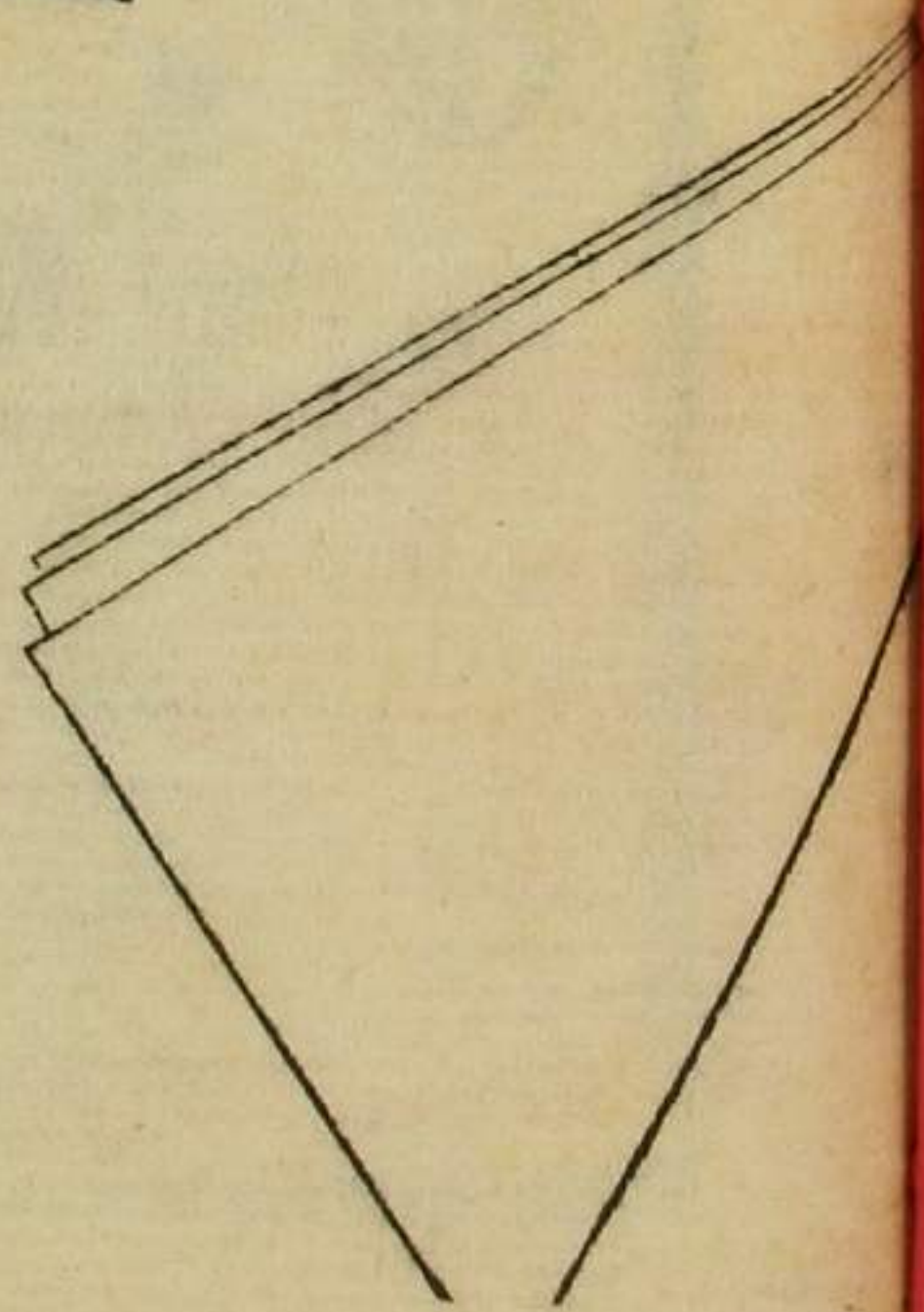
76
435
1



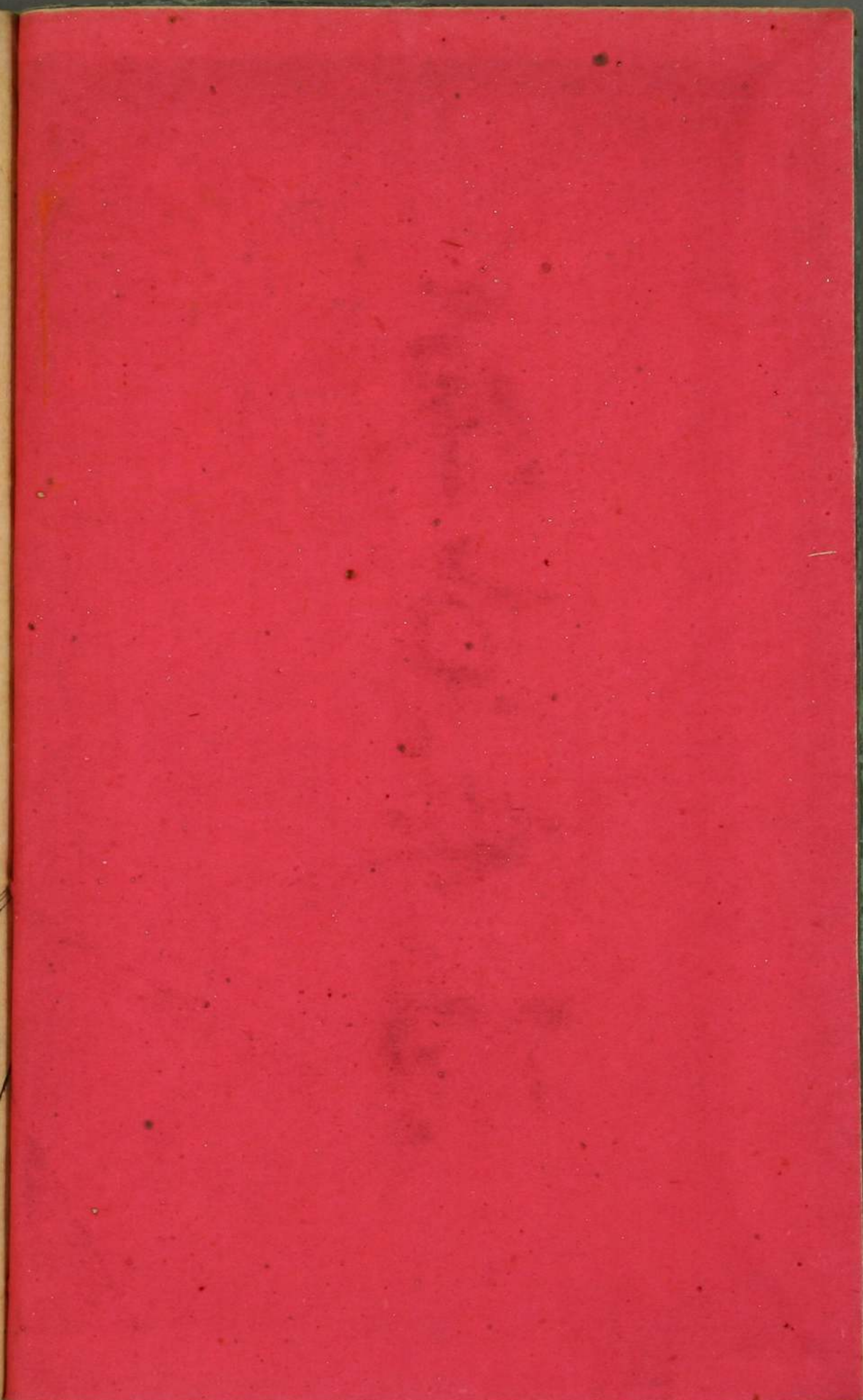
門与滿
號 435
卷 /



東京坡
情



明治二十六年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈



東京
蘇子
蘇子
蘇子

東京妓情叙

蘇子

甚能而朝與地酌花

時夕上月如月蘇情在

是度乎風流才子早愛解語花

戀者增月教坊出唱平

康中可如苦高難谷殊狼攬

蘇子

蘇子

東京妓情叙

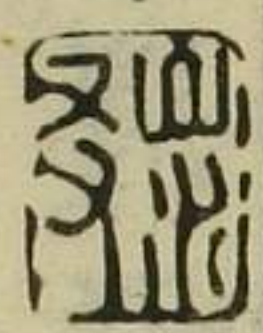
真似今や春の繁多。
 西個花月可並賞不試之傳
 劣亦正在此候乎乃記
 有述之煙草筆兼下小蘇
 小緑珠之心家以位の具
 之一袋来信追境に袖以一

小冊張横森坊平一康
 其下費少取
 以多於其手叙
 明治十六年花鳥の之
 醉多道士識に南の條
 軒中よの石外賣花の

早櫻廿一糸肩子朱。



東京妓情序



新橋繡車朝訪棠娘之家柳橋畫舫夕
 維李姐之門東台花開珊鞭走公子馬
 濕江月昇羽觴飛美人舟嬌苑春濃常
 植消魂種湘簾夜深巧護開語花我東
 京妓流盛何秦淮柳巷比但夫人情日
 移世態年變江左溪川老翁凌說舊歡

東京妓情

序

四

城南金匱。大官頗誇新華。盛衰何亦有
 定。冷熱由來難測。且波關東。霸氣漠然
 收跡。卻是西土士人。翕焉當路。於是乎
 人情頓變。東京欲無復一江門兒。感化
 所至。施及妓流。敢俠韻致之事。既無解
 者。猥陋貪婪之風。殆作時俗。可勝歎哉。
 噫。東京之花。澤江之月。待春而粲然笑。

逢煠則瓏然來。春花繩月依依。誇東都
 之色。人情風俗。何獨失江門之氣乎。唯
 是遊人豪華。不讓往時。或攜以學。謝安
 或忘歸。擬劉郎。若夫文牀溺愛。糟糠妻
 空下堂。陶朱破產。西施再鬻。歌舞其盛
 其榮。將使孫綰折北里之筆。使羅隱燒
 比紅之稿。亦可謂盛矣。雖然。名花早謝。

昔風難留。佳人常悲薄命。才子長歎落
魄。無古今一也。寧知將來之變遷。有甚
於昔時乎。余少年之昔。亦是青樓薄倖
之徒。追憶往時。桃姊李妹。為當季之知
己者。或流離浪越。白雲無所重逢。或湖
波崔塵。返魂香何堪焚。思低唱淺酌之
古。感併袖同車之舊。見二分之明月。徒

悔揚州無賴。聽七年之夜雨。獨恨錦城
歌吹。吁嗟。十季無為。長作都門漂泊之
人。豈得無感於舊情事乎。余先輩醉多
道士。有情之人也。見其東京妓情。都下
幾處教坊。寫情抽態。實是明治妓叢之
活歷史也。後世訪蘇小之跡。弔真娘之
墓者。其讀之與余同感否。

明治十六年花朝後三日

東都 淇上醒史撰



畊煙逸人書



凡例

一 余嚮きに風流の罪障消滅乃爲め因果能化に
 懺悔して花柳事情を著し幸ふ通客粹士の愛
 讀する所となり爲め亦非常乃圓助を儲け巨
 額の公債證書を購ひ得たり然るに持病再發
 一 權妻相乗り幌掛け頬片押付けと浮れ遊び
 一 を以て又候らふ身代をむテケレツパアと
 皆夢に歸せり退て思ふ是れ罪障乃未だ竭ま
 ざるなりと則ち自來遨遊し々飲み潰れたる

一 東京妓街二十有餘ヶ所の歴史並びに風俗心事手練手管その他苟くも妓乃身上其関係ある事実も盡く之を寫し出し以て更に懺悔せんとして欲を是れ復々厄介ある書を擔ぎ出し世間通客の氣を妙にせしむる所以なり
 一 余元來階子上戸なり故其その飲む決しし一樓みく足まりとせば則ち柳橋に酌む酒未ど醒めざる内飛ぶ芳町に至て飲み更らに轉がす數寄屋町又も日本橋舟至り潰る是を以

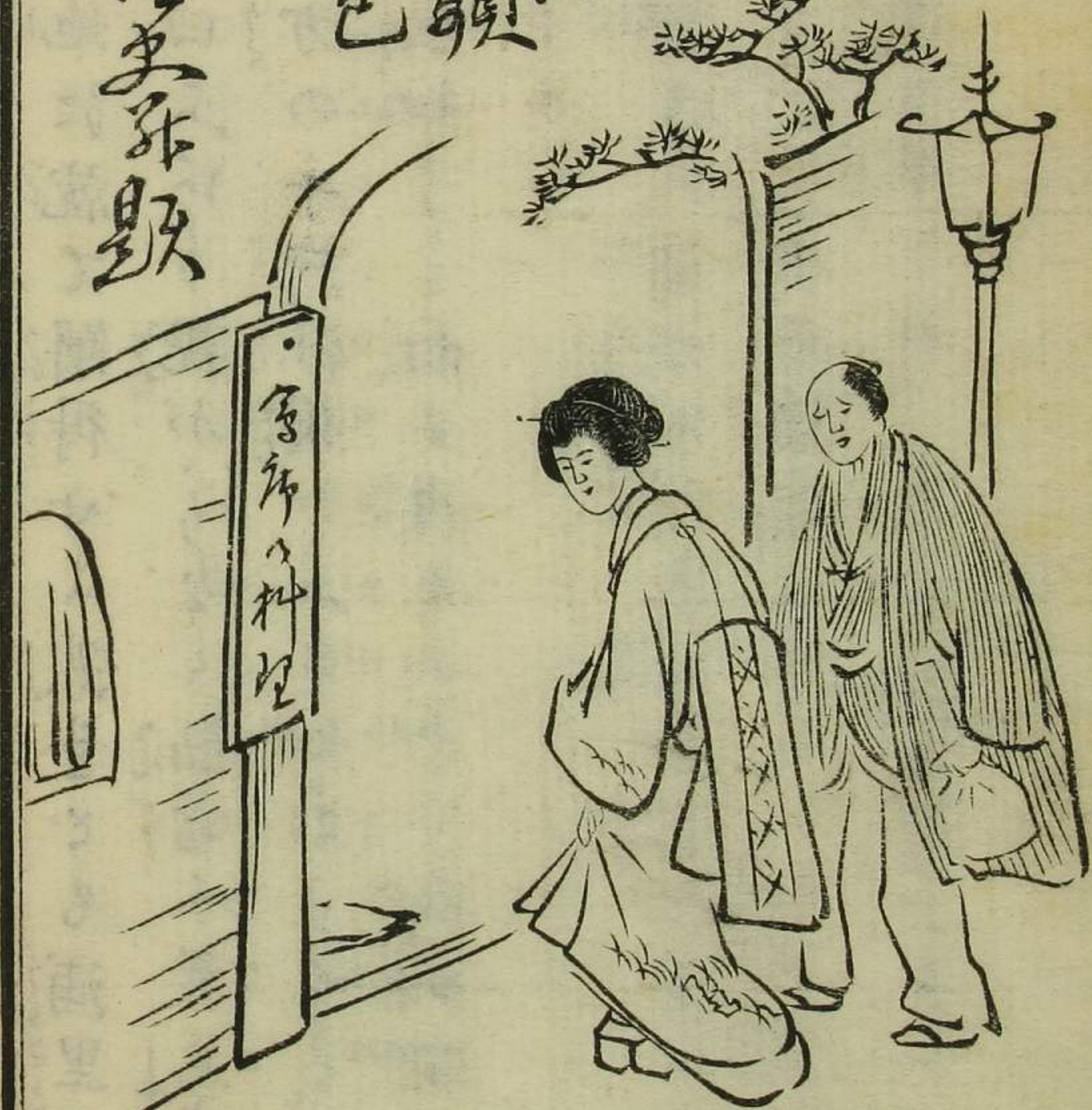
一 疑もざる所なき
 一 東京三千の妓中此書と讀ぐ或も大に怒り隊伍を組ぶ次郎けんの家へ何れ込むもの何らん是れ豫め期を所あり然れども余一言あり夫を次郎さんをも色男なり今業平あり其の襲ひ來りく一たび御顔を見れば恍焉とす

て彼を愛し之を憎むの偏頗なり本編中抑揚褒貶あり蓋し事實を綴り出たり多読者にくそは愛憎舟出りに非ざるも諸姐の信じく疑もざる所なき

先きを争をひ情夫ふせんを為めに同士打ち
 とかや明けし若しそを之を否なりとせむ
 看よ看よ次き乃真像哉看よ
 一 東京綺羅叢裡の事四十餘類あま未だ盡く
 たりと云ふ程から然らむ尚之を記さん
 乎筆及ぶべきに非らば語寫さんまふり
 所謂以心傳心の秘事巨多とをを試みに思
 花乃香ひ如何寫に歟妓の風致態度何ぞ之と
 異ならん世間同臭れ人を仔細を究るんと

欲せむ実地に就て解得せむ然も浦里の
 主人曾て曰ふり親がりたる勘當り主
 ならむ親方の手前仕損なむ知れことと
 先づ是を兼知し而る後その手で御釈迦の
 顔かぎべーサ
 廓の次郎さん濯水不言の花々幻をぬり
 たるあゝ宿醉乃頭痛を堪らむ向ひ酒献
 立てれ違ま筆をけし例の管をま

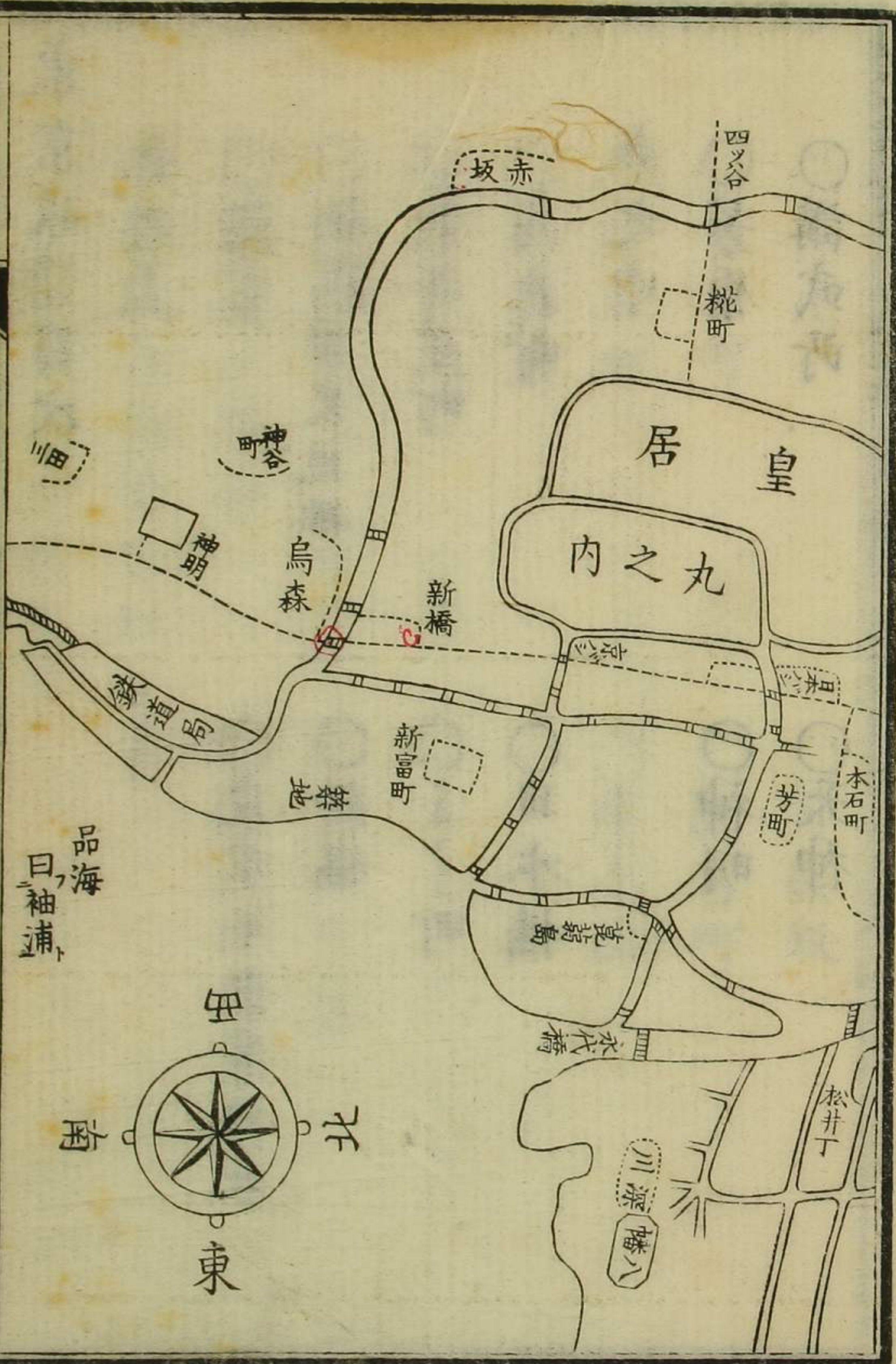
今宵定
聘誰家女
柳探三腰
月样眉本
在門前步頻
急碎翁子已
待多時
涯上醒更非歎



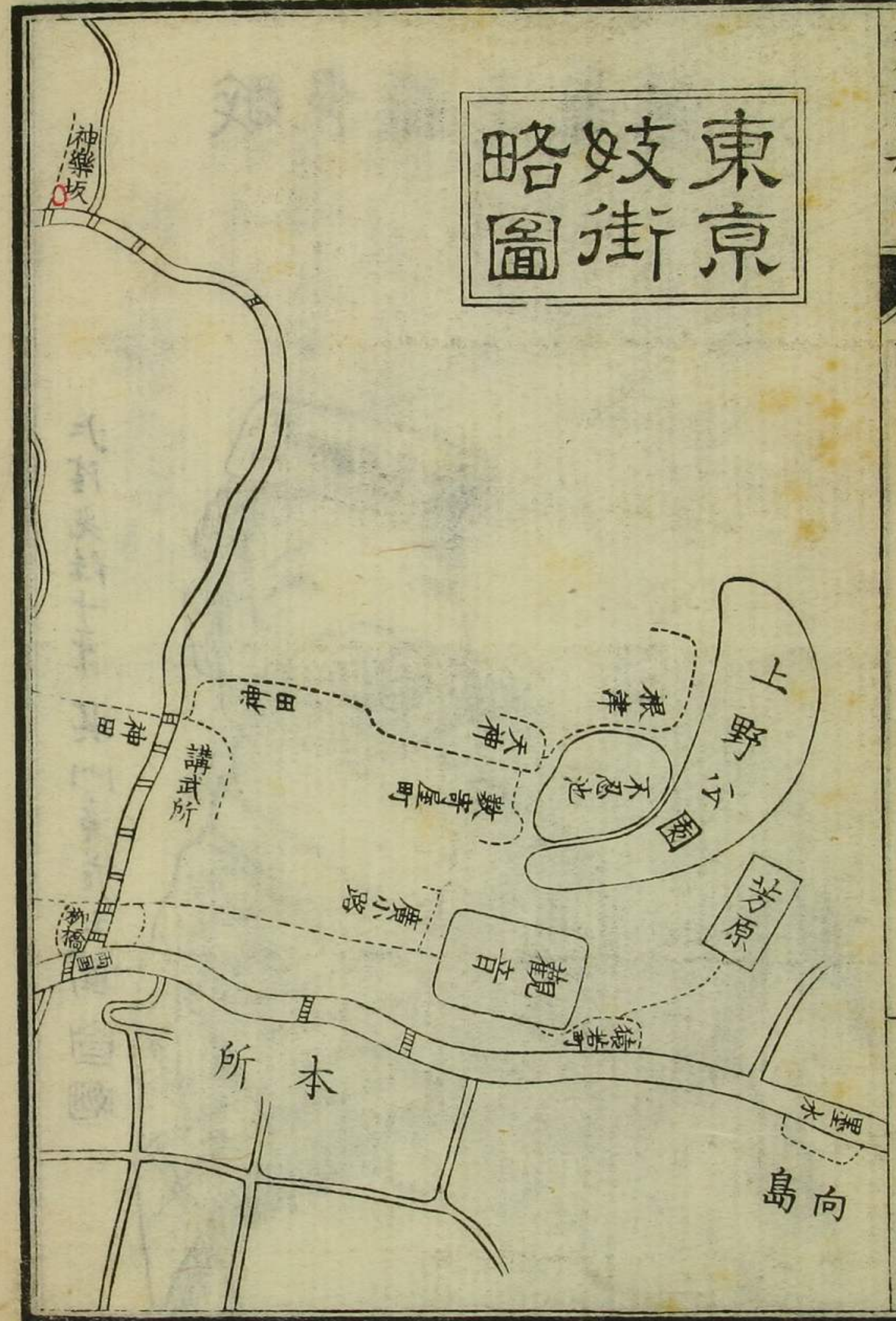
醉多諧士真像



大清光緒十年 吳州市危吉画 圖



東京妓街略圖



東京妓情目次

卷之上

○緒言

○柳橋歴史風俗

○敷寄屋町

○烏森町

○東京平康等級表

○新橋

○ふし町

○日本橋

卷之中

○芳原

○講武所

○神明

○天神

○深川

○本石町

○猿若町

○蒟蒻島

○神樂坂

○新富町

○廣小路

卷之下

○妓の成立 (自前) (抱) (叩き別)

○藝妓の辛苦

○藝妓の心

○藝妓乃性質を知る事

○賣春ふ二途阿る事

- 情夫の見立
- 妓と酒樓との関係
- 妓奴の事
- 妓と妓奴の関係
- 纏頭乃事
- 席の速あると好む事
- 歌妓けあり果
- 野夫
- 遊の種類 (酒樓) (待合) (船宿) (妓家)
- 逸話

上中下合巻通計四十四類

東京妓情卷之上

花柳御門 醉多道士戯著

緒言

○魔王曰、
 自許通人、
 醉翁自惚、
 先発端緒、

六朝の金陵古へ佳麗の地と稱し而して綺羅紅粉の盛ある江南に冠たり當時余としてその間々流連せしを校書の風光と織出し以て有情公子乃襲となし延て後れ粹客に傳ふ屋ありしも風流の罪科古み浅く今ふ深く五濁乃身を此明治天地に在て

○隨金丸
亦變

○聊消遣
耳

之を見れども見つゞ之と探まども得む鳴
呼何ぞ昔人の脂香粉膩に幸はしき今人乃
薄倖なるや退く顧ふ情天色界有て以來歳
月幾子ぞや而しき妓乃情も時人亦随て變
ト燕臺乃歡を風俗に由り移るあゝ猶墨陀
春漲りて騷客銀鞍ふし玉策紅塵と花下
ふ賜げ二州月湧けも畫舫あゝ蘭棹球杯
と波上り飛むも如く時好と追く變移あ
き能く自然も則ち金陵の榮麗紅顔に富

○醉翁曰
使恨後朝
者世間只
有余耳

○醒史曰
時字有味
○魔玉曰

み吳宮の讌に邀るも固是れ六朝の佳人才
子と待て價あるものなり豈に明治乃粹史
と賞花し微吟春思秋想之と金閨小
繫が以て後朝後恨ましむるに堪えんや蓋
し人も同しけはとも時異なれをあり反て
思ふ今の花苑香雨乃情亦永く余が萬言と
玉門関小遺し去る曉もを同一なる歎太
上老君と俟て知らざるあり然らば則ち情
し時の情と娛しみ讌も時々讌と樂んを我

翁自擬老
子探八鳥
十洲八鳥
否

○花柳曰
盍見敵之
的

適之れ適せも則ち巳人のみ何を金陵乃綺
羅に眷戀もると須ぬんや是に於て乎彼嚮
さ小北里誌平康記より後々板橋雜記白門
新柳記より我前に繁昌記柳橋新誌より後
小十七名花譜新橋雜記より皆あ當時に風
俗と點綴し歡情と寫し出し以て適の適と
見し未ど嘗く舊煙花と記そ者も何らぞ否
之と記そも錦腸の才人々用なけをあり
而し此数部の書南都の脂香平康の艶冶

○中洲曰
非醉翁不
能野夫着
想

○魔王曰
翁脱兜吹

才子の不遇と傷み佳人の薄命を悲しむ或
も飲又毫あるもの或も情に濃かある者を
寫し來り神蕩け魂消ゆと雖も未ど着想
と野夫にしその情痴と虚無し香花の間
小走り彼花を実かく此実ハ味あく其培養
も斯の如くその鬻ぐも斯の如くと入て湘
簾繡幕の中を覗ひ之と世間々唱道するに
書も何らさるあり余や振古の不粹者流章
臺小登る毎々妖婦艶姫より臂鉄砲と賜ひ

東夷支情
卷之二

本音

○所謂犬糞討難者

以て跳つけらるる夫れ臂銃と賜はる者ハ無情漢あり自から無情漢とて妖婦艶姫の跳つけらるる所となると知らむ則ち摘花偷香の念ひあり故に又是親しみ彼に疎の別なく乃ち香園と蹂躪々々名花と毀傷そもも敢て痛まるとせども是れ此著所なり

○東京平康等級表

東京	平康	等級	表
柳橋	新橋	一等	
鬻寄屋	ふし町	二等	
烏森	日本橋	三等	天神 講武所 神明
深川	本石町	四等	
新富町	猿着町	五等	松井町 糶町 根津
蒟蒻島	西久保		廣小路 赤坂 向島 三田

右表ハ冷熱及び妓数の衆寡を以て定め

たるにあらざりて聲價成以て次第せしむる

○柳橋 在日本橋區兩國橋畔

○元柳町 ○新柳町 ○吉川町 ○米沢町 ○

橋北平右工門町に住む歌妓を総稱し

て柳橋藝者といふ

○歴史

○醒史曰
説起艶婉

柳橋ハ旧蘇小門に待つ所の地なり往時
六十年前岡場所○當時深川音羽等の遊
外岡を許さざり頃深川を都門第一の煙

○一切御
氣被付

花たりしが越前守水野氏が幕府に閣老た
るの日其淫蕩乃風自然と市井に移らん
とと歎き之を廢したるに是處小依て活路
を求めたりし坡筆を俄か糊口の術と失
ふに如何とも詮方なきに當りて柳橋ハ曾
て深川通ひの画舫發する所なれを游客自
然と集ふあらんと暗算を起し一人移り
二人來り技を賣りに果し善くその目
的に投じ随て酒樓茶肆塵を張り門帛を翻

○花柳曰
今聽公寒心

へ一場の熱地に變ト歲月の久一き終
純然たる綺羅淵叢ともあまり○地ハ墨水
乃下流に方り神田川の咽喉を占め目下に
二州の長橋と臨む盛夏乃納涼晩冬の賞
雪游客呼で海内無双と称せしも物變り星
移り一新の後に及で関西の子弟情を解せ
徒らに坊間の無香花を愛し且つ攀折の
求めに急ふるより柳橋妓の意思相合もば
爲り本地ハ冷と來たり之と十五六年前

に比まれど先づ桑榆の風色なり

○風俗

○一刀兩断
東京の風月場実々數十を以る算ふ而
之に甲たるものハ縦ひ桑榆の日と雖も
柳橋以措て將と何れの處にか求めん抑も
本地の風俗も他の綺羅叢と趣を異にし江
戸、兒を待て始めく價あるものなり故くそ
の粉飾淡白いし脂濃ならず意氣狭み

○仙史曰
一語重千金

○魔王曰
不保無過
賞

○所以柳
橋妓

て風致に富む柳北翁の所謂神田上水と飲
む江戸見れ氣象に――深川の餘風と存
る者かり然もバぬや雛妓のときより客の
側々侍り泰然として噪――からど又嬌て意
を迎ふが如き習ひかく飽くまぐ老成の趣
きを具せり而して一幟と樹るゝ至りてハ
争ふゝ牛後を避け技と競ひ才と術ひ寸歩
も譲らど頗る負けし魂も富む是と以て乎
我意も合もされバ假令数十金と投ぐるも

○附用事
言妓價自
辨

○醒史曰
天府宣告

之が為め性を折る錦帯を解かど又其意
投ぐるれを用事を附了遊ぶと厭む情と狭
と立通――後ち已むの氣象と云ふべし然
れども狭に偏するの弊かその情夫を扱む
乃眼も之――往々鶯の者或も角力又も船
子等と愛し世と謂ふ通人粹客も戀せど蓋
し鶯乃者華も淡泊ふ――霄越しれ錢を持
たす総――濃重からさむ最もその意氣
再投ぐる故あらん此情態を知らむ――関

○輪公黙然無一語

西の子弟等祇園町或は大坂島の内々冶遊
する趣を以て此々臨むが故に常に歌
所とあるなり嗚呼東京三千の歌妓中関東
の氣象を墮さど昔時江戸は趣きを存する
者唯り柳橋ののみ之を東京一の藝妓と
云もびくく何ぞや中井櫻州柳橋を賦する
詩有り曰ふ

○醉翁曰柳橋近在眼中

關東霸氣漠然終唯存絃歌存古風回首二
州橋兩岸人在青樓春色中。

○新橋 在芝區与京橋區境

○金春新道 ○日吉町 ○南鍋町に住む歌

妓を總稱して新橋藝者といふ
新橋藝者ハ舊金春藝者と稱せり幕府の御
能師金春太夫の賜地に住せしを以てあり
當時ハ微々とて振を柳橋に劣るあり
数等遙か日本橋藝者の下に在り一
新以後田舎漢江戸兒に代りて要路に中り
その政務に暇争ひて関東の花を折らんと

○慷慨

東洋史
卷之七

○柳妓是
左幕党

○新妓自
勤王党

柳橋小遊遊せしが哩共もべらんまいと
意氣相合もど殊に柳橋妓ハその左右まゝ
所とあるを屑とせど多く臂銃乃ハを喰
せたるより銃公等失望乃餘り恰も連合志
たるが如くその接近一新の際丸の内并び
く官負の住居と成る金春に向ひ蘇小を訪
ひ始め同地の妓も千歳の浮曇華に遇ひ意
外の繁華を招き勢ひ日に汪盛の形状と際
一恰も好し明治五年政府より練瓦石室築

○是揚

○醉翁曰
此是新橋
雜記

○魔王曰
理密事詳

造乃舉に遭遇一蔽舎寒屋一朝ふく金碧
の章臺と變ト土地の聲價頓に加しり恩波
延て歌妓の地位に至り遂ふ今日の盛を占
め柳新二橋と并稱せられ稍凌んとする勢
ひあり降吉勝田氏詩あり曰く
天向此樓別貯春滿庭香迸綺羅塵誰知倚
翠猥紅容悉是佩金施紫人。

○風俗

粉黛施こして濃く柳眉畫て厚く粧飾華麗

東京支那
卷之七

と重むるも新橋乃風俗なり元と此地田舎
 漢にふりく熱鬧場とありしなれを左も何
 りかん殊に雅淡潇洒の趣きに乏しく又意
 氣地の何物たるを知らば新橋雜記に所謂
 凡百悉皆柳橋に如りむく蘇小を問ふの
 車柳橋小向まゆく新橋に來るの多きを
 何ぞや笑諛媚と献むるに巧み小色授け眉
 與ふるに善きを以てありと謂ふべし穿ら
 得たる者ありと風俗已ま斯の如くあるら

○抑揚自在

○使新妓報面

故に江戸兎の客に接するを好まざる好ま
 さるに非らむ田舎漢と騙るが如くならお
 色も是故乎客ハ髯の多少を論せど帽の
 高低を問もど官負を好み学者商人等ハ多
 少錢あるも之を輕蔑し妾ハ某參議に陪し
 たり我も馬華長者に寵ありとの卑劣の心
 も其語氣と鼻頭に顯れ通人粹客をく
 嘔吐に堪えふらしむされを雛妓乃内より
 敏捷めく嬌聲能く客を釣り殆ど蒼姬を

○中洲日罵詈譎語極美思醉翁有意趣意恨然乎



東京如神
卷之三

○花柳曰
娼賣敏捷
者
○青紫人
言官員
○醉翁曰
是平康等

歴きるに至る然しその舉止乃陋あるハ子
供らしき所なく殆ど芳原の雛妓と伯仲に
況して蒼妓も客と視る路人の如く親舊を
以て情と異にせば唯金錢によりて異ると
る所ののみ是れ常々青紫の人と騙るの習
ひ遂に性と為りしもの歟柳北翁爲めに新
橋の遊ぶと心快しとせむ風外山田氏
寄せる詩あり曰ふ

城北城南處々樓冶郎漫道足溫柔吾人獨

級表

愛柳橋柳越様風姿宜雅流

○教寄屋町 在下谷區上野公園下

○同朋町 ○教寄屋町に住む歌妓を總稱

一々教寄屋町藝者といふ

○歴史

教寄屋町は何に由来し々妓巢となりや
と詳かにせむ想ふに當時湯島天神に旗亭
ありて妓を禁したる故之を目的とし一も
上野の觀花不忍池の賞雪小飲む者をおて

○関鎖有法

にせし者歟一新以前も柳橋の次位小立ち
他の紅裙隊に長たりしが柳橋とその盛衰
を同ふし客と天神及び新橋を奪われ今も
暮春の花に髣髴たきども残香猶ほ愛る才
子あるが為めに敢て冷と告げざる趣きか
り

○風俗

○魔王曰
醉翁有負
負眼

本地の藝者ハその風俗柳橋の潇洒半を取
り之に新橋の華麗を加へたる者なり蓋し

○中州曰
難保證矣

その潇洒あるも日夕赴く所の酒樓公園の
山小接し不忍の水々臨み春に宜しく夏に
宜しく秋冬亦憐むべき状を呈する有が故
に所謂山水靈ある所人亦秀かるもの乎そ
の装の花麗なると輕躁薄行あるを此地に
遊ぶ人定まらざる學者遊び官負遊び書生遊
び商人遊び職人に華族も日々客と異に
俗にいふ人馴れると以て然るなり然れど
も江戸藝者の藝者たる見識と存しく俠の

○醒史曰
醉翁非說
其情痴乎
吾乎

○然々々

風あるも遙かに新橋の上に在るは是と
以て西南の役熊木と籠城し負傷あかから
も病兵と看護したる種田少将の小星阿勝
出で意氣地乃為めに風も多く小峯頭も
是等皆未だ新橋三千の紅粉中に聞かざる
所なり然れども本地の藝妓と城北と偏棲
山水の風致と心逸しく乎進取の氣も乏
ほしく且敏捷なりと謂もて俠かして頑に
失はるものあらん乎

忍岡對不忍池水。水有蓮兮山有櫻。佳人供

得兩般美。櫻花麗與白蓮清。

○よ一町 在 日本橋東

○元大坂町 ○住吉町 ○葎町 ○濱町三丁

目に住む歌妓を総称しくよ一町藝者と
いふ

○歴史

芳町を舊歌妓の本色たる地にあらば往昔
堺町并びに葦屋町に劇場あり一頃芳町及

○所以尻
之輕

び之に隣る甚左衛門町も變童の淵叢少
て酒樓茶肆も多く之が雲雨場なりき當時
妓も絶りに觀劇の客に侍りたるの歡を添
ふるに止まりしが劇場乃淺草に移轉せし
後を愈よ振るとは唯彼の銀座造幣鑄有りし
を以て薪水の煙をその平康の間立登り
獨立割據を維持したるに米商會所設立以
來朝に素寒貧母し夕に陶朱の富を攫取
する輩所謂浮雲錢を以て浪りに抛ちしよ

○醉翁曰
破亦投機
出沒

り妓籍に入るとの俄かに増加して從て聲價
頻に増し今も東京第四位の綺羅叢とて不
れり然もとも芳町を米商會所とてその盛衰
を俱に在る猶や狼の狼と得て歩むと一般
なれも同會所乃存廢よりてその相場も
下向まふもあがり上運びり今も弱氣の睨
み合ひといふべし

○風俗

花より而して香なり實より而して味あり

東京支那

○仙史曰
是一個照
魔鏡

洋画の菓物と一般なりて芳町藝者乃風俗
かり譽も求免む耻も顧みざる亦是也
本地乃風俗あり是れ常に陪せる客と米商
及び相場の為と出京する田舎漢中利と汲
汲たる不文者ある故薰陶せらるる然る者
か試みと芳町妓女風流情事と説くも彼れ
越人の秦人の肥瘠と視るが如き思持あり
試み小彼れ説くに表彦道と以てせむ彼れ
喋々としく之と辨ぜん其無香無味ある推

○出入芳
妓心中来

○抑揚有
法

しと知る趣き是を以て乎歌妓より出づ娼
流り入りたる姫吉あり梨園弟子と繾綣し
て数回醜名を新聞紙に傳へし奴あり深川
より移住ある金八の如きを夙に俠を以
て名あり是れ晩花枝を辞するに候也及び
たりと雖も老練を以て芳町と錚鏗する
者にしと此妓の技量風采總かに芳町乃面
目を掩ふよ足る乎然れども本地の妓を眞
泉と糞土視し意氣を以て任せて米商に馴

るを以て淡粧爽意あるを之を新橋に比す
 きたを稍取るべき所あり余も芳町の諸姐よ
 望むその姿様と意氣とを米商會所の興敗
 に拘らるは底意強く慄えどしと持ち堪え
 んことを

芳園春満簇姪娥。蠅殻坊人賭米多。贏得浮
 華万千利。飛成蛺蝶向嬌窩。

○烏森 在新橋以南

○烏森町 ○日蔭町に住む歌妓と総称す

○先欲言 應來主義

て烏森藝者と云ふ
 曙天啞々と啼く歸途を促し黄昏鐘と和し
 愁成告ぐ烏の森何の物好きぞ後朝惡む
 べき聲の下に艶叢を置きく情痴の種を醸
 せや此地舊中川氏及び溝口氏の藩邸に
 け妓流の高履を聞く處に河らに一新廢藩
 の後その邸址を開いて往來に便せし是より
 り新橋以北乃妓争ふに移轉し或ひもその
 繁華と追ふる他所より移るもの日に多き

○今變、為
弄肉刀所

と加へ遂々一廓の嬌窩とてあり麻姑曰
く吾自接待以來見東海三島桑田と何ぞ思
もん昔一武門竹刀と舞ゆるの地今想夫憐
と彈むるの所とならんとも

風俗

○魔王曰
事實写出
んすん

新橋藝者と幾かに一帯水と隔つのみその
花月樓橋北にに飲む妾も新橋藝者でと
と云も誰の疑も新橋妓との伊勢源南橋
りに在に登り妾も烏森藝者でと云も一免

○中洲曰
残酷哉醉
翁言

も又誰り疑はん蓋一意氣風俗その間に毫
髪と容れざむんたり然とともう其異ある
所以の者も鮫鱒等無情に〜墻花と蹂躪
るると以て遊冶と一之が為め孔方兄と浪
用するより世の所謂應來妓あるもの本地
に輻湊一家々多くも妓あて娼あるもの
あり試み、橋南の待合茶屋に至り直ちに
溫柔郷と探らしむる者を命ぜむ立所に應
ぞへ斯の如きも東京三等以上の平康よ

○魔王曰
醉翁記當
年乎

○中洲曰 我之疴痛 至是稍収 矣

○鮫公無 形

於て稀れに見る所あり然らむ之と三等以
下に置かん乎否々悉く娼流と学ぶさいふ
ふ非らば此平康く掲藉するふも拘らるる
綽約たる蓮花その子何れもあり又況んや
新橋と混合して善く遇い善く親しみ勢ひ
烏森の二字と削りて新橋を冒さんとする
む也然るからに田舎圃出しの鮫公にも尤
も適當の遊び場に充分愉快を取ら
るべしと信じて目下も款を新橋に納むる連

○中洲曰 又使障壁

各と通ぜり古語云ふ性を以て集ると余
新橋南北に於て亦曰ふ
僅與新橋隔帶流多情尤好買溫柔低々笑
語知何事燈影模糊半夜樓

○日本橋

- 駿河町 ○品川町 以上
- 大工町 ○数寄屋町 ○佐内町 以上
- 妓と総称し日本橋藝者と云ふ
- 稻荷新道 ○元

○歴史

東洋史稿

日本橋之舊各藩御留主居の會同と同地の
魚肆を目的に〜成り〜聚落あり故に當
時に在る繁華五指の中〜屈したるも
維新以來俄か聲價を落し妓も亦聞ゆる
この甚か稀なり

○風俗

彼のベランメイを以て名を全國に博し任
俠を以て一歩たも人に譲らざるは是日本
橋魚河岸の健児の謂なり此と往來〜此

○借魚河
岸説起
風

と歡飲するハ日本橋藝者なりその性質の
輕噪に〜浮行あるハ言も〜知る
然るからに好ん〜淡粧とあり曾て抹脂
郭袖の習ひあり實に日本橋の冠字に背の
ふる風俗あり然らむ是に陶冶せらるる
氣ありか〜云〜決〜あま〜蓋〜同
所ハ富商大賈の淵叢あり〜之ハ仕ある主
慣手代筆を騙し以て化粧の料〜を已
れり天祿と認るか爲めに俠氣ハ常〜此不

○醒史曰
决字酷

○王慣手
代筆好面
皮

東洋史稿

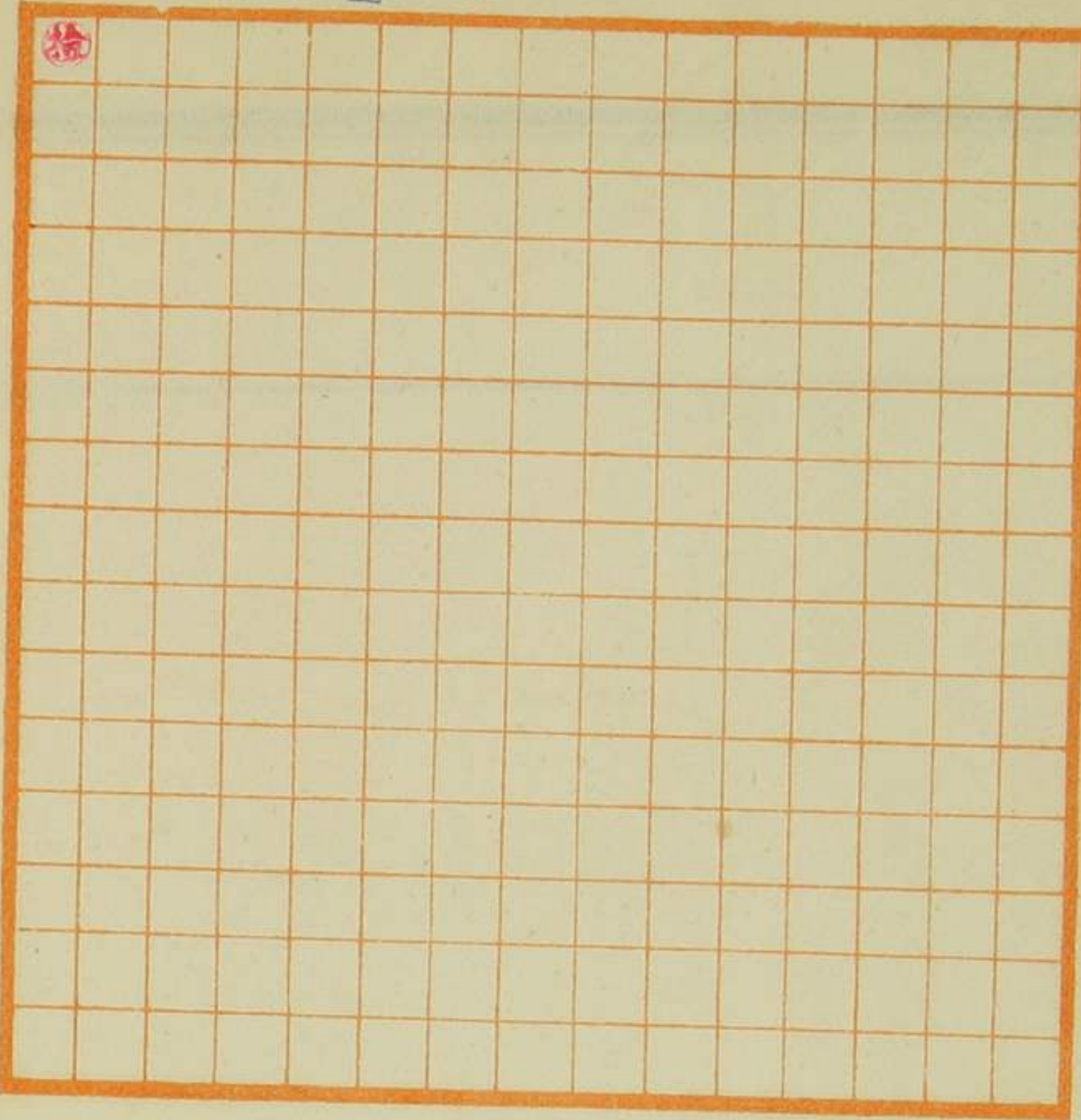
○魔王曰
罵新橋未
已深矣醉
翁之怨念

良心に蔽られて伸びざる者か且つ本地の
妓も朝散暮集の者多く充分に日本橋の水
と飲む暇あまに據る飲概々日本橋の
風俗と論ぜれを商人手代職人等に頗る適
まる遊び場といふ可し故に若し鯉公と
て新橋に遊ぶ趣を以て此地に臨ましめ
恐くハイケス加ネエ人たよの罵詈を被む
らん是れ性相合もされをかり
淡掃画眉時様新扶桑橋北湍街春万林勝

五幾樓客悉是輸籌賣錦人。

東京妓情卷之上畢

壬午年 4 月



東京女子
卷之上

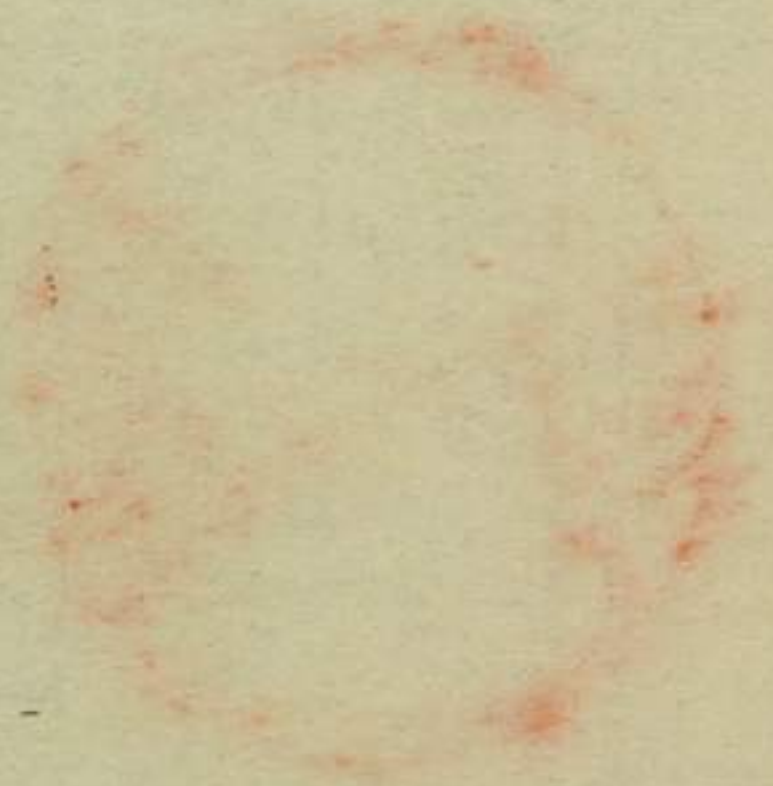


十一



東京女子
卷之上

五世對家松久詩集卷八



十一

